
職業ヒーロー、月給手取り四十万。転職希望中。

オズワルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

職業ヒーロー、月給手取り四十万。転職希望中。

【著者名】

オズワルト

【あらすじ】

俺はヒーロー。月給手取り四十万もの高給取り。
でも、俺はこんな仕事好きじゃない。できることなら辞めてしまいたい。
金のためだけだ。こんなこと。
ああ、畜生。なんでこんなことになっちゃったんだろ？。

業務内容、戦闘。

何のために生まれて、何をして生きるのか。
答えられないなんて、そんなんのは嫌だ。

昔、小さい頃にテレビで聞いたフレーズが頭の中で響いている。
俺は何のために、何をして生きているんだろう。
今、何をしているのか。その答えは簡単に出てくる。
それは手段だったはずだ。けれど、何時の間にかそれは手段から
目的に刷り変わり、俺をがんじがらめにしている。

そのためだけに、俺は今生きている。

俺はそんな俺が嫌で嫌でたまらない。

あたりは暗い。そして狭い。横幅五メートルくらいのそこに、俺
はいた。

俺の目の前には敵がいる。一言であらわすなら、化け物だ。

成人男性と同じくらいの背丈をしているそいつは、蠍のような
外見をしていた。全身は黄緑色。頭部は蠍のそれで、両腕には巨
大な鎌が一つずつ。そのまま蠍を巨大にして一脚歩行させている
感じだ。太股の太さは人間の倍以上。膝の関節は人間のとは違い、
逆関節。よくもまあ、それでバランスをとっているよな、と感心す
る。

そんな事を考えている俺だって、中々に奇妙な格好をしている。
俺を一言で表すなら、変身ヒーロー。幼い頃によく見ていた、等

身大の特撮ヒーローのようだ。

俺はスーツを装着している。世間には公にされていない、出回れば世間の常識が覆るほどの、高度なクノロジーの結晶だ。

全身を覆うそれは赤をベースとしている。頭のヘルメットにはサーキュレーションモーターやら赤外線スコープの機能が取り付けられている。光の全くない場所でも戦えるように、だ。

ここは、地下の下水道。地上から水が滴り落ちてくる。外は小雨なんだろうか。

俺は膝の上まで汚染水にどっぷりつかっている。洗剤や雨水だけなんかじゃなくて、排泄物なんかも混じっている。一年前までは嫌で嫌で仕方がなかつた。少しほは慣れたが、まだ嫌悪感がある。

蝙蝠が跳躍すると同時に、污水が飛び散る。俺のスーツに数滴降りかかつた。

天井スレスレを滑空する奴を追う。水の抵抗を無理矢理振り切る。地面を蹴り、蝙蝠に飛びついた。

黄緑の身体を掴む。重さに耐え切れず、蝙蝠は落下していった。水飛沫を上げて、俺たちは污水に突っ込む。

水中で蝙蝠が暴れた。二つの鎌がスーツを切り刻もうと襲い掛かってくる。俺は咄嗟に左右のそれを掴んだ。蝙蝠は力強く押し切ろうと、全体重を乗せてきた。水中だから大した重さにはならない。

蝙蝠の腹を蹴り上げる。奇妙なうめき声が聞こえ、直後天井に蝙蝠の身体が激突した。

起き上ると同時に、蝙蝠が俺に向かつて突進してくる。襲い掛かる鎌を回避し、バックステップ。鎌が下水に叩きつけられた。水飛沫で視界が遮られる。

視界をサーキュレーションモーターに切り替える。水飛沫を跳ね除け、蝙蝠が突進してくるのが見えた。上から振り下ろされる鎌を紙一重で回避する。

大振りな動作には隙が伴う。鎌を振り下ろしたことによつて、蝙蝠は体制を若干崩していた。

間合いに力強く踏み込んだ。

蝙蝠の顔面に思いつきり右拳を叩き込む。拳を振り切り、吹っ飛ばす。蝙蝠の身体は十五メートル吹っ飛んだ後、コンクリートの壁に激突し、めり込んだ。

チャンスだ。

足に意識を集中させた。頭部のヘルメットは俺の思考を的確に読み取り、スースに指令を下す。右脚部にエネルギーがたまつていく。一気に十メートル以上を跳躍し、とび蹴りを蝙蝠の腹に叩き込んだ。やりすぎるほどに。

渾身の蹴りは、蝙蝠の腹部を貫通してコンクリートの壁にめり込んでいた。

あ、やつべ……。

ほんの一瞬、暗い下水が光に包まれる。

足の裏に籠められた全てのエネルギーが、コンクリートの壁にぶちまけられる。

発光を伴った爆発がコンクリートを破壊した。まぶしい光が下水の中に差し込む。

蝙蝠の身体は四散し、あたりに散らばっている。敵は倒した。

それはいい。いいんだけどよ。

貫通した穴は川原にそのまま繋がっていた。下水の水が漏れ出していく。

また、やつちまつた。

今月一回目のヘマだ。まだ今月は二十日間もあるのに。

「給料、減つちまつかもしれないなあ……」

俺は深くため息をついた。

業務内容、戦闘。（後書き）

引用、アンパンマンマーチ。

上句一文。立地条件良。ただし不満多々あり。

俺は早瀬正樹、二十歳男性。職業ヒーロー。表向きは公務員。月給手取り四十万。成績及び普段の仕事へ向かう姿勢によつて給料の上下あり。

家族は、高校一年生の妹の美希、そして高校受験を控えた中学三年の弟の善樹、そして病院で寝たきりになつた母さんがいる。父さんは一年前に死んだ。

家の働き手は俺一人。一人で家族の入院費やら授業用やら何から何まで稼がなくちゃいけない。

父さんの残してくれた金だけでも数年は働かないで暮らしていくたけれど、でも、金つてのは油断すればすぐに底をつく。

だから俺は働いている。
気乗りのしないこの仕事を続けている。

この街の駅には、一本の路線が通つてゐる。朝と夜はサラリーマンでじつた返しになる。駅前には七階建ての電気屋があり、競うよう大型の本屋やファミレス、パン屋やファーツフード店がひしめいてゐる。ラーメン屋は四軒、牛丼屋は有名どころが殆ど営業している。その少しの合間を縫うようにしてビルが聳えている。昼間はそこで、せつせとサラリーマン達が働いている。

駅から少し離れると、そこにはマンションがいくつも建てられている。当然のように一件の大型スーパーが存在し、互いに客を取り合つてゐる。

義務付けられた毎日のトレーニングが終わり、俺は先輩である源

さんや乃木さんと共に家路についていた。

源さんは三十代にしては屈強すぎる体付きをしている。一の腕は常人の倍はある。胸襟が盛り上がり、今は違つが、シャツを着てればピチピチに突つ張るだろう。

乃木さんは物静かな男の人で、俺の六つ上。後輩の俺の面倒をよく見てくれている。顔はなかなかに整つていて、未だにこの人に彼女がないのが信じられない。

駅から離れたこの場所には、一戸建てや安アパート、銭湯に商店街などの、駅前とはまた違つた風景がある。賑やかな駅前とは違い、ゆつくりと落ち着いている感じがする。近くには高校があり、その隣にはエスカレーター式に進学のできる大学もある。どちらかと言えば、俺はこっちの、このゆつたりとした感じが好きだ。駅前はごちゃごちゃしていて、あまり好きじやない。

長距離やらスクワットやら腹筋やら背筋までさせられたせいで、身体が重い。歩くだけで辛い。もうかれこれ一年は繰り返している事なんだけれど、未だに慣れない。

今日は下半身と体感。明日は上半身強化メニュー。明後日になれば、ようやく流しで楽なメニューになる。今日は源さんが休養日だった。明日は乃木さんが休養日。上半身、下半身、休養日つてメニューを三人でローテーションしている。

俺たちの表向きの職業は市役所に勤める公務員。実際は、街に現れる化け物達を人知れず倒しているヒーローだ。給料の話をすると、源さんはたしか、百五十万くらい貰つてたと思う。乃木さんは百万。二人とも俺よりもはるかに高い給料を貰つているのは、ちゃんと結果を出しているからだ。

まだこの仕事に就いてから一年くらいしか経つてないから、手際が悪く、月に倒す化け物の数も少ない。それでも、手取り月四十万つてのは、二十歳つて言つ俺の年齢を考えれば、十分すぎるくらいだ。でも、俺にはまだ金がいる。

「今日も一日、がんばりましたつと」

源さん フルネームは「階堂源さん」が、呟く。

「頑張つたつて、今日は源さん、営業に出てないじゃないですか。しかも、トレーニングも流しだつたし」

俺達は化け物を倒すために外に出る事を「営業」と呼んでいる。一般人に話を盗み聞きされても問題がないように。

ちなみに、「営業」命令が出た時、優先的に出向くのは前日に軽いトレーニングをした者、となっている。今日は、昨日軽めに流した俺が「営業」に出る。明日は、今日流した源さんが。明後日は乃木さんが、と言った具合だ。

「俺は今年で三十八。普通だつたらメタボつてる歳だつての。若いお前らとは違うんだよ」

などと源さんは抜かしているが、二十歳の俺よりも体力は上だし、筋力だつてかなりある。腕なんて、平均的な成人男性のそれよりも二倍くらいは太い。太股は筋肉が隆起して逆に気持ちが悪いくらいに見える。

「俺よりも乃木の方が動けるしな。もう駄目なんだ。最近は身体が重くてよ」

乃木さんはそれに対し頭を振つて答えた。謙遜しているんだ。そんな事ないですよ、とか、そんな感じに。多分、その通りだ。

一年間付き合つてきて、ようやく殆ど喋らない乃木さんの思考を読み取れるようになつた。

乃木さん 本名、乃木功治さん は源さんほど筋肉があるわけじゃないけれど（といふか源さんが異常なんだけど）、引き締まつたいい身体をしている。腹筋力を入れなくてはつきりとわかるくらいに割れている。源さんは体重の重さの分の差もあるだろうけど、三人の中で体力が一番あるのは乃木さんだ。足が一番速いのもそう。かつて、強豪高校のサッカー部でレギュラーとして全国大会に出た事があるらしい。身体を使うセンスが高い。源さん曰く、「ポテンシャルの塊」だそうだ。

「つーかよ、正輝テーマ、またやつたらしいな。何回目だよ」

「え、何のことつすか。いやだなー。おかしな事いわないでくださいよ」

「「まかしても無駄だつて。お前はいつになつたら下水を破壊しないで闘えるようになるんだよ」

「いや、まあ。あははは……」

「……早瀬、お前はもう少し落ち着いて闘つた方がいい……」

俺たちに聞こえるか聞こえないか、それくらいの声で乃木さんが呟いた。

「何なお前？器物破損楽しんでんの？俺らの仕事を公になんて絶対にしねーから、法律違反にはならねーけどよ。減給はされっけど」「そんなわけないじやないっすか。給料下がるのなんて、最悪ですよ。今、余裕ないですし。今月はまだ一回目なんで、大丈夫でしたけど……」

三人の中で一番ひょろつちいのは俺だ。筋力面では源さんに絶望的なまでの敗北を喫している。脚力や体力でも乃木さんに圧倒的に劣っている。反射神経がいいわけでもない。何か別の特出したもの、例えば状況判断が言い訳でもない。身体を鍛えている分、その辺のサークル生活をしている大学生よりは筋力もあるし動けるが、それだけだ。

だから化け物の撃退数も伸びないし、だから給料も増えない。

「……焦っているか……？」

乃木さんの言うとおりだ。俺が一番劣っているのがわかつていて、だから、焦る。焦りがあるから、ミスをしてかして撃対数が伸びない。給料も増えない。そして、また焦る。悪循環だ。そうわかつても、焦らずにはいられない。俺には金がいるんだ。一刻も早く、給料を上げなきゃいけないんだ。

「最近はあいつらの数も減つてきたよなあ」

源さんがぼやいた。あいつら、というのは俺たちの敵である、あの怪物達の事だ。

「そつすね。前は三日に一回くらいは出てましたけど。一週間ぶり

「でもんね」

「あいつらいないと暇なんだよな。トレーニングばつかだと飽きるつづーか」

不謹慎だな、とか思いつつ、俺は相槌を打つ。あの化け物たちに、殺された人間もいるんだ。まあ、「冗談だつてことはわかるんだけどさ。

「でも、平和に越した事はないつすよ

「いや、まー、確かにそれはそうだな」

あの怪物たちが一体なんなのか。科学者たちによると、あいつらは突然変異の産物らしい。詳細な説明をされたことはなかった。興味もなかつた。倒すべき相手。俺には、それだけで十分だ。

「数、減つてきてるつて事なんつすかね」

「こー」一ヶ月の傾向をみていると、そうなのかもしれない。

「さあ？ その辺は俺にはわからん。こりゃー、俺たちがお役ごめんになる日も近いかな？」

「……笑えないっすよ」

仕事がなくなるつて事は、要するにクビだ。表向きは公務員ということになつていて、政府から特殊な形でやとわれているわけだから、解雇されて記憶を消されるという可能性がないわけじゃない。回異物たちを目撃した一般人にも記憶を消したり違う記憶を植えつけたり、そんな事をしている奴らだ。ありえなくはない。

「冗談だつて。上手く隠れてるか、安定期が重なつてるだけなんだろ。そのうち、すぐに忙しくなるぞ」

そうじやないと困る。もしもこの仕事をリストラされたら、俺は生きていく術がない。

源さんはどうなんだろうか。結婚はしているし、ちゃんとその辺の事は考えて、貯金とかしてくれているのかもしれない。父さんもそうだった。

商店街の中に俺達は入つていく。商店街はアーケードになつている。塗装のはげかかった看板や、地面の罅割れたタイル。お世辞に

も綺麗とは言えない。

その分、活気に溢れている。八百屋のおっさんは元気に声を張り上げてるし、魚屋ではマグロの解体ショーなんてのをやっている。店の前に小学生が何人も群がっていた。

他愛のない会話をしながら俺達は商店街の中を歩く。

「ありがとうございまーす」

花屋の店員が明るい声で客のおばあさんに微笑んでいた。おばあさんの手には花が添えられている。

俺も、たまにいく花屋だ。この辺で花を買えるところとこつたら、商店街の中か、マンションの立ち並ぶ住宅街近くにある大型ショッピングモールの中にしかない。別にどちらで買つてもそんな違いはないと思づ。

「ま、そんな心配するこっちゃねーわな。最悪、コネを使って市役所に天下りすりゃいいんだしな」

源さんの明るく無責任な発言に、若干救われる。いや、そもそも俺を不安な気持ちにさせたのは源さんか。感謝するのは色々と間違つてるな。それに、この歳で天下りつてのもどうかと思づ。

「そんじゃ、俺は今日当番なんでこの辺で。後は一人でようじくやつてくれ」

俺と乃木さんが頭を下げた。一応、先輩なんだ。最低限の礼儀は守る。心の中でちょっとくらい悪態をつくのは、しょうがない。

源さんは狭い店と店との間に入つていった。少し窮屈そうだ。その先には入り組んだ道があり、行き止まりとなつていて。何も知らなければ絶対に気がつかない場所にスキヤナーがあり、そこに専用のIDカードを差し込めば壁がずれ、裏道へ繋がるようになつている。

俺達の雇い主は政府だ。街の改造なんて、当たり前のようになつている。

例えば、商店街の中にある、マンホール。この街にあるそれのいくつかは、俺が闘つていた化け物 ビーストを捕獲し、下水に

引き込む装置となつていて。蓋が電話ボックスほどの高さにまでせり上がり、誘導式のワイヤーが目標を捉える。強化ガラスの中にビーストを引き込み、そのまま下水に送りつける仕組みになつていて。地下には俺や源さんが下水に直行できるようになると、通路が用意されている。源さんが向かつたのもそこだ。

「……どうする。飯でも、食いに行くか……？」

俺達はよく一緒に飯を食いに行く。せいぜい牛丼屋やラーメン屋程度だが。い。

乃木さんはいい人だし、源さんもなんだかんだ言つて優しい。いい先輩だ。一緒に飯を食うのは楽しい。

「すいません、今日は止めときます」

けど、今日はそんな気にはなれなかつた。

「……そうか……」

乃木さんの口調には少し寂しそうな感情が籠つていた。意外と寂しがりやなんだ。この人は。

「すみません。今日はちょっと、寝たい気分なんで」

嘘をついた。本当は寝たくなんてない。ただ、独りになりたかつただけだ。

商店街を抜けた。ここから先、俺と乃木さんの帰り道は違う方向になる。

「じゃあ、俺はこの辺で」

頭を下げ、乃木さんと別れた。乃木さんも軽く会釈をしてくれた。俺は一人で街を歩く。

今は四月。入学して間もない学生と一つ学年を上げた学生が、世間には溢れかえつている。新鮮な気分で毎日を過ごしてゐるんだろう。俺だって本当だつたら、大学三年生になつてゐるはずだつた。

今それ違つた三人は、多分この近くにある私立大学のの大学だ。賭け麻雀の話をしていた。三万も負けた、と言つていた。

懐かしい。俺も大学に入りたての頃よくやつていた。あれほど大学生に向いてる遊びはない。娯楽の極地だ。今でも源さんや乃木

さん、あとはスーツのメンテと改良をやってくれる数人の技師たちと麻雀をやるが、しかし大学生の頃にやっていたあの雰囲気はもう味わえない。

こんなはずじゃなかつた。どうしてこうなつちまつたんだろ？。後悔なんて及ばない所に原因があつたつていうのに、俺は心の中で悪態をついた。

ちくしょう、ふざけんなよ。何で俺は、こんな毎日を送らなくちゃいけない？

我が儘だつて事はわかっている。皆、生きる為に毎日働いているんだ。俺はたまたま、それが人よりハードで人より暇がないという、それだけのこと。

わかっているが、俺はこの仕事が嫌で仕方がない。

回想、至急新人求む。

あの時の事を思い出す。父さんの葬式の、あの日のことだ。

「お悔やみ申し上げます」

喪服を着た男が、俺達に深々と頭を下げる。母さんは丁寧にお辞儀を返す。俺もそれにならつた。妹の美希と弟の善樹も続く。それが何度も目の行為かは、もう数えていない。

父さんが死んだのは突然だった。何の前触れもなく、ある日いきなり逝つてしまつた。

俺がそれを聞いたのは昼間の大学だった。学食でカツカレーうどん定食を食つている時のことだった。俺は校内放送で事務に呼び出された。特に心あたりもなかつた俺は、一気に定食を駆け込んで、それから事務へと向かつた。どうせ大した用事じやないだろう、と思つていた。そしたらだ。事務で受け取つた受話器からは、機械的で感情なんて籠つてないような声が「あなたのお父さんが亡くなりました」と告げてきたんだ。

突然すぎて、訳がわからなかつた。

死因は過労死。電話越しに、そう言つていた。

父さんは市役所で働く、公務員だつた。土曜日も日曜も祝日も仕事に出ていた。かと言つて仕事にしか興味がないというわけでもなく、俺がまだ小さかつた頃、休みを取つてテーマパークに連れて行ってくれたりもした。俺や母さん、美希や善樹の誕生日は絶対に祝つてくれた。いい、父さんだつた。

その父さんが、死んだ。

葬式はあっさりと終わった。

半ば放心状態だったから、具体的に何をしてたかなんて口クに覚えていない。

葬式が終わって、火葬も済んで、俺は親類の叔父さんに言われるがまま、料亭の手配をしていた。どうして葬式が終わつたあとに、料亭なんか行かなくちゃいけないのか、俺にはわからない。

そういう慣習なんだという事はわかるが、どうして皆、そんな気になれるんだろうか？

母さんは無理して笑顔を作つてゐる。けど俺は、明るい顔なんてできそうになかつた。

「早瀬正輝君かい？」

予約していた料亭への連絡を終えた俺に、その人は尋ねてきた。「あなたは？」

「俺は二階堂源。君のお父さんには、よくしてもらつていた。君にだけ、話しておきたいことがある」

場所を変えようか、と男、つまり源さんは駐車場に向かつていく。俺は不信感を抱きつつも、ついていった。

「君のお父さんのやつていたことについてだ」

源さんはあたりに人がいないことを確認すると、俺に向かつて語りだした。

父さんの本当の仕事について。

「なんなんですか、それ」
訳がわからなかつた。

だつてしんじられるか？ 俺の父さんが、普通の父親だった父さんが、謎の怪物達と鬪つていたなんて。

この街には怪物が現れる。

そういえば、そんな都市伝説を聞いてことがあった。でもそんなの嘘だとしかおもえなかつたし、信じてもいなかつた。

でも、目の前の男はそれが真実だという。

「君のお父さんは、人知れず町の平和を守つていたんだよ」

父さんが怪物退治の仕事を始めたのは、二十四年前だという。

その数年前から日本各地で現れるようになつた怪物たち。政府はなんとか情報操作をして存在をもみ消していたらしい。

「そして次第に、情報操作だけでは抑えきれないほどにまで被害は拡大してしまつたんだ」

だからその対策として、政府は対策本保を立ち上げた。一般人に知られず、化け物達を倒せるように。

都市部なら必ずある地下空間 下水に化け物たちを誘導し、強化スーツを着てそれを殲滅する。

父さんはその装着者として選ばれた。スーツには適正があるらしい。スーツのシステムが神経と接続する際に、適性がなければ人格が壊れてしまうらしい。父さんにはその条件をクリアしていたというわけだ。

父さんはその提案を呑んだ。そして、化け物たちを倒すヒーローになつたというわけだ。

馬鹿馬鹿しい。冗談にもほどがある。

「そして、三日前。君のお父さんは、化け物たちに殺された」

「ふざけてるんですか？」

「信じられないだろうが、本当の事だ」

その日あつたばかりの、体格のいい厳つい男はそう言つた。

「俺の責任だ。俺がもつとうまくやっていたら、きっと光輝さんは死なかつた」

なんだよそれ。わつけわかんねえんだよ。そんなんで、父さんは死んだつてのかよ。

今まで何も知らなかつた。いや、知るわけなかつたんだ。父さんは

はずつと隠してきたんだ。でも、なんでなんだよ。

「光輝さんはいい人だつた。正義感が強く、いつもみんなのために戦っていた。あの日も、襲われている民間人を助けようとして、それで……」

「正義感が強くて？　みんなのために？　そんなんで死んだってのかよ。」

「これが眞実だ」

「全てを否定したかつた。だが、それが本当の事なのだという。たちの悪い「冗談だとは思えない。」

「一緒に俺たちと闘つてくれないか。光輝さんの後を継いでくれ」男は一枚の紙切れを差し出してきた。

「これは俺の携帯の電話番号だ。気が向いたらでいい」

「そういって、源さんは俺の前から去つていった。」

捨てるやうか、こんな。

父さんが何で死んだのか。そんなのはどうでもいい。俺は気に入らなかつた。俺の知らない所で、思いもしな様な事が動いて、そのせいで父さんが死んだ。

「氣に入らない。」

ぐちやぐちやにしてやりたかつた。全部否定してやりたかつた。

「けど、できなかつた。」

「俺にはそれが必要だつたから。」

数日後、俺は源さんに電話をかけた。

父さんの遺志を継ぎたいとか、俺が街を守つてやるつて言つて、立

派な決意や正義感なんてのが理由じゃない。

ただ一つだけ。金の為に、だ。

俺の家は、父さんの収入で成り立っていた。母さんも昔は働いていたらしいが、元々病弱だつたせいか、数年前から入退院を繰り返している。とてもじゃないが、働けない。高校生の妹や中学生の弟はなおさら、働けるわけがない。

大学生の俺は、バイトをして多少は家に貢献することができる。でも、そんな端金で生きていけない。俺と妹たち、合計で三人分の学費を払わなくちゃいけない。母さんの病院代も払わなくちゃいけない。ガスも水道代も電気代もはらわなくちゃいけない。

俺には金が必要だつた。それ以外に理由なんてない。

金のために、金のために、金のために……。

毎日義務付けられたトレーニングを行い、ビーストと呼ばれる怪物たちを倒す為に下水で闘う。休日なんてない。常に呼び出しに応じれるようにしなければいけない。泊まりの遠出をするには、年二回のみ許されている有給を使うしかない。

大学を中退した直後には友人からも遊びの連絡があつた。だが、その殆どを断らなければならなかつた。結果、連絡は途絶えていつた。

俺はどんどん一人になつていいく。

源さんや乃木さんどんどん仲良くなつても、むしろそうなればなるほど、周囲の人気が離れていく。家族ともなにかが少しづれていいく。

金は手にはいる。月四十万の大金だ。けど、代わりに大切な何かが欠けてゆく。

帰宅、ほろ酔いしつつ自問自答。

夜。

「んー……」

寝れなくて、ベランダで酒をあおっていた。

なんというか、俺も大人になつたんだなあつて思う。オッサンみたいだ。まだ二十歳なのに。

「起きてたんだ」

声がした。妹の美希だ。帰つて着たばかりなのだろう。美希の通う、名門私立の制服を着ていた。

「まあな」

俺は視線だけ向け、返事を返す。

「善樹は？」

「塾だよ。あと少ししたら帰つてくると思う」

高校受験を控えた善樹は、毎日夜遅くまで塾に通つている。奨学金を取りたいと言つていた。そこまで頑張らなくてもなんとかしてやれる。助かる事には間違いないんだけど。

「仕事、どうなの」

ぶつきらぼうな口調だ。けど、美希なりに心配してくれていると言つ事はわかっている。

美希は、どうか俺以外は皆、父さんが過労で倒れたんだと思つている。実際、そう説明されたはずだ。父さんとのことがあつてせいで、美希は俺の家族はみんな、ちょっと神経質になつている。俺に対してだけじゃない。全員が全員に対して同じ事を思つてゐる。自分は頑張るくせに、他人の頑張りを恐れてゐる。その結果死んでしまうことが怖いんだ。だから、余計に自分が頑張る。
俺だつて、そうなのかもしれない。

「まあ、ぼちぼちだな」

「『まかさないでくんない?』」

冷蔵庫を開けながら美希が呟くように言った。

「大丈夫だ。まだ若いんだから。心配すんなよ」

「でもさ」

「いいから任せとけって。俺は兄貴なんだぜ。アテにしてる」
酒を一気に飲み干した。そうしたい気分だった。

俺がやるしかないんだ。

父さんは死んだ。母さんは病院だ。妹の美希も弟の善樹も、金を稼ぐには若すぎる。俺だって若いが、だけど俺には大金を手に入れるだけの手段がある。

だから闘ってる。気乗りもしないのに身体を鍛えて、やりたくもないのに下水に両足つつこんで、それでもしなきや、金は稼げない。

「……少しは気をつけよな。父さんみたいになつたら、みんな悲しむから」

俺のすぐ後ろの美希が立っていた。片手には窓のロッパが握られている。

「ああ、大丈夫だ。問題ねえよ。だからわ、お前はさっさと寝ちまえよ。肌に悪いんだろ。夜更かしするとか」

「まだ十一時だけど」

「どうせ今日も長電話でもするんだろうが。さっさと寝るつもりでいこうっての」

美希が真夜中に一時間以上の通話をするところのは当たり前のことだ。別にそれに関してもがめるつもりはない。高校生なんてそんなものだ。

「わかったわよ。アンタも、さっさと寝なさいよ」

そう吐き捨て、美希は台所に向かっていく。浄水器のロッパに注いでいるのだらう。うちにはあまりジュース類のものはない。飲み物と言えば、牛乳と酒くらいだ。

美希はもう何も言わなかつた。俺も何も言わなかつた。

酒をもう一度煽ろうとして、中身が空だということに気がついた。

夜風が身に染みた。もつ四月だというのに。

「そうだよ、やんなきやならねえんだよ……」

俺は空のスチール缶をきつく握り締めた。

母さんの入院費はもちろんのこと、美希や善樹の学費も馬鹿にならない。今年、善樹は高校受験を迎える。塾にいかせてやるのにも、金はかかる。来年は美希が大学受験だ。受験料が足りなくて、滑り止めを受ける事すらできないなんて、そんな状況にしてやりたくない。

だから俺は鬪う。それ以外の理由なんてない。やりがいなんて感じない。

元々、運動なんて好きじゃないし、格闘なんてもつと好きじゃない。むしろ嫌いだ。それでもそうしないわけにはいかない。

なあ、父さん。どうして父さんはこんな仕事をやってたんだ？

毎日毎日、バケモノ、バケモノ、バケモノ、バケモノ。街を守つたって、誰かに賞賛されるわけじゃない。給料が良いだけだ。

そんのは嫌だ。このまま終わりたくない。

金を稼ぐ為だけに働いて。金を稼ぐ為に生きたとして。その結果何が残るのだろう。

なあ、父さん。教えてくれよ。どうして父さんは、こんな仕事を続けてたんだ？

源さんは昔、父さんはみんなのために闘つていたと言つた。見ず知らずの誰かを守るために、こんなことをずっと続けて立つてたつてのか。それが、父さんのやりたかったことなのか？

俺は違う。

俺にだって人並みに夢はあつた。建築の仕事につきたかった。こんな仕事、本当はやりたくなかった。でもこうしなければ生きていけない。このヒーロー紛いのことをつづけなくちゃならない。

父さんの生き方を否定する気じやない。でも、これは俺がやりたいことじやないんだ。

そして、言い訳のように、この境遇を呪つている。

どうしてこうなったのか。

どうしてこんな事をつづけなくいやいけなかつたのか。

どうして父さんは死んだのか。

どうして父さんはこんな仕事なんてやってなのか。

クソッタの「ミ野郎だな、俺は。

父さんがこの仕事をやつていたのは、単純に父さんの欲求の為だけじゃないはずだ。俺たちを食わせるためにも働いていたはずだ。それなのに俺は、父さんがヒーロー紛いの仕事なんてやってなければ、と思っている。

嫌いだ。こんな俺は嫌いだ。

生きる為に金を稼いで、皆で生きていくのが目的だつたはずだ。金を稼ぐのは手段に過ぎなくてかつたはずなんだ。

けれどそれは目的にすり替わっている。

何をするにしたつて、あの仕事が邪魔をする。何処か遊びに行く事なんてできないし、友達と遊べる事も少ない。金を稼ぐ以外、他にやる事がない。趣味をつくってしまえばいいのかもしれないが、けどそれって、俺が本当にやりたかったことじゃないんだ。

いつしか、金を稼ぐ事以外に目的がなくなつていた。

母さんは早くよくなつて欲しいし、美希や善樹には大学に行つて欲しい。けど、俺自身に対する目標がない。金を稼ぐ意外にすることがない。

何のために生まれて、何をして生きるのか。

目的もなく、金を稼ぐために生きる。そんなの、馬鹿馬鹿しそうじやないか。

酔っているのかもな。

そんなに酒は飲んでいないし、俺は酒に弱くない。
けど、そう思つことにした。そうしなければやつていけそうにな

かつた。

起床、早朝出勤。

携帯の着信音で目が覚めた。

誰だ……？

家中で携帯電話の着信音がなるつていうのは久しぶりだった。家族との連絡くらいにしか使っていなかつた。寂しい二十歳だ。

携帯を開く。

「もしもし」

「やつと繋がつたな」

その声の主は源さんだつた。

「なんですか、いきなり……」

まだ眠い。まぶたが重い。寝てみたい。欠伸をこらえながら電話を握つていた。

「大事な話があるから、ちょっと顔出せよ」

唐突に源さんが言つ。

「顔出せつて、どこにですか。まだ朝つすよ?こんな時間から何を話すつて言うんですか」

「決まつてんだろ。支部にだよ。乃木も呼んでるから。とにかく、お前も早く来いよ。じゃあな」

通話が途切れた。むこうが切つたんだ。言いたいだけ言つて、勝手な人だ。今に始まつた事じゃないが。

時間を確認すると、まだ朝の六時だつた。

いつもの出勤時間までには十分に余裕があるので、呼び出されたと会つては仕方がない。

俺はぬぐぬぐとして居心地のいい布団から這い出し、部屋を出てリビングへと向かつ。

「おはよう、兄さん」

「もう起きてたのか」

そこには既に弟の善樹がいた。机に向かい参考書を開いている。その隣には既に書き込まれた計算用紙が数枚、きちんと重ねておかれていた。

「今日は早いね。どうかしたの？」

「たまには俺だって早く起きるさ。お前はちゃんと寝てるのか？」

俺が昨日寝たのは十一時半くらい。その時間になつても、まだ善樹は帰つてきていなかつた。そつちはいつものことだから心配はない。だが、こんな朝早くから勉強をしているのは知らなかつた。俺はいつも、七時半くらいに起きるからだ。その時は善樹は一通りの学校へ行く準備を終えて朝飯を食べている頃。その前に勉強をしているなんて、知らなかつた。

「寝てるよ。毎日四時間くらいは

その睡眠時間は中学生としてどうなんだろうか。

「無理すんなよ」

なるべく健康な生活を送つて欲しい。だが、善樹に何を言つても聞かないだろうと言つう事はわかっていた。こいつも美希と同じだ。誰かが頑張るくらいなら、自分が頑張る。そういう奴なんだ。

善樹は塾に行く事だつて拒んでいた。そんな金がかかることはないでいいよ、と言つて。

とはいえ塾で誰かに教えてもらえるのと一人でやるのは全然違う。だから俺は半ば無理矢理な形で、善樹を塾に通わせてくる。

「朝飯、昨日の残りでいいか？」

「うん」

俺は冷蔵庫から昨日の晩飯のカレーの残りを取り出した。一日間続けてカレー。我が家ではよくあることだ。

母さんが入院している今、食事を作ることができるのは俺しかない。その俺のレパートリーもたかが知れている。しかも味もよくない。だから、必然的に味がある程度ごまかせるカレーの頻度が増

えてしました。おかげは冷凍食品だ。

「ご飯と共にカレーをレンジで温め、それをテーブルへと運んだ。

「ん、いい匂い」

善樹がシャープペンシルを動かす手を止め、教材を脇へと避けた。「じゃあ善樹、俺、ちょっと外に出るから。皿は食い終わったら流しに付けといってくれ」

源さんに呼ばれているんだ。本当は俺も朝飯を食いたかったが、そんなにゆっくりしている時間はない。

「こんな朝早くから？どこに？」

「職場だよ。先輩に呼び出されちまつたんだ」

「何それ、イジメ？」

「まあ、そんなもん」

俺は適当に返事を返しながら身支度を済ませる。寝癖が少々気になるが仕方がない。施設にはシャワールームがあるし、そこで直せばいいだろう。源さんの用事が終わってからでもいい。まだ朝は早いし、そこまで人目を気にする必要もない。

「ふうん。わかった。姉ちゃんには僕から言つとくよ

「悪いな、助かる」

よくできた弟だ。物分りはいいし、我が仮も言わない。思えば善樹は生まれた頃からそうだった。夜中に泣きじやぐる事なんて殆どなかった。やめると言えばすぐに止めた。反対に、美希は四六時中泣いていたのを覚えている。

「いつてらっしゃい」

「ああ、言つてくる」

わざわざ善樹が玄関まで見送りに着てくれた。

本當、よくできた弟だ。

会議と敵、そして秘密事項。

「遅いぞ、正輝」

部屋に入った俺に、源さんが言つ。そのすぐ傍には乃木さんもいた。二人ともパイプイスに腰掛けている。

ミーティングルームの中には、俺たちのほかに五名ほどの科学者たちがいる。皆、白衣を着用していた。俺達には一切目もくれず、パソコンを操作して、スクリーンを準備し、トランシーバーで遠くの仲間と連絡をとりあつていた。

「一体なんなんつか、こんな朝っぱらから」

まだ六時半だ。早朝出勤にしても早すぎる。普段ならどんなに早くても九時くらいなのに。

「大事な話だよ。電話でも言つたる」

「そんなんじや何もわからないつすよ。せめて、何に関係あるかぐらいうつてください」

「敵が動き出したんですよ」

口を開いたのは源さんでもなければ、乃木さんでもない。白衣を着た連中の、その一人だった。名前は確か、福地さんだ。

「敵つて、ビーストのことつすか」

「ビーストよりも厄介な相手です」

即座にはその意味を理解できなかつた。

福地さんの発言は、ビースト以外にも俺達の敵がいるつてことを意味する。

敵がいる？あいつら以外にも？そんなの、聞いたことなかつた。

「親玉だよ。あいつらのな」

源さんが厳しい口調で言つ。珍しい事だ。

まあ、それも気になるが、もつと気になる事がある。

「ビーストの親玉？ 初耳つすけど」

「言わなかつたからな」

そんな、当然の事のように言われても。

「オリジナル、と私たちは呼んでいます。まあ、詳しい説明はこれから行いますので」

福地さんの言葉と同時に、部屋が暗くなつた。スクリーンに青い光が映される。

近くにあつたイスに座る。少しして、この街の地図の画像が表れた。

「時間は真夜中の一時。幸い、一般人の目撃者はいませんでした」
福地さんが手に握るパワー・ポイントの赤い光が、ある地点を示す。
そこは俺の家の近くだつた。全く気がつかなかつた。

「発見直後、未確認ビーストを下水へと誘導しました。二階堂源がそれに対応、目標をオリジナルと判断しました。データー照合からも間違いではありません」

マンホールに擬態されている捕獲力プセル。そこから伸びるワイヤーでビーストを捕獲し、下水へと送りつけている。オリジナルとやらもそうしたのだろう。

地図は街中のものから、入り組んだ通路のようなものへと切り替わる。この街の下に広がつてゐる、下水道の地図だ。

「戦闘開始から一分後、オリジナルが逃亡を開始しました」
パワー・ポイントが入り組んだ道を動いていく。けどその道、なんか最近通つた覚えがあるようなん……。

「そして、早瀬正輝が前日に破壊していた地点から離脱

「あ」

思わず声が出てしまつた。

「その後、二階堂源が追つも、複数のビーストが出現。これと交戦状態となります。オリジナルはその間に姿を消しました。それから

すぐにビーストも撤退。どうやら目的はオリジナルの逃亡までの時間稼ぎだったようです」

福井さんが何かを言つていたが、あまり耳に入つてこなかつた。やつてしまつた。最悪だ。俺のヘマのせいだ。オリジナルとやらがどんな奴かはわからないが、逃がしちゃいけなかつた相手のはずだ。俺が昨日、下水を破壊してさえいなければ、逃げられなかつたはずなのに。まだ今月一回目だからと安心していたが、これだと減給もありうる。

「ここ数ヶ月のビーストの出現間隔が低下していたのは、オリジナルによつて指示されていたためだと思われます。戦力の増強を行つていた可能性が高い」

「……戦力の増強……？ オリジナルにも、そこまでの知能はなかつたはずだが……」

「ある程度の知能を獲得したのだと思われます。二階堂源の報告では言語のようなものを呟いていたそうですから」

乃木さんの質問に福地さんが答える。どうやら、乃木さんもオリジナリストやらを知つているようだ。

「オリジナルは今もなお戦力の増強を続けているのだと思われます。あれが行動を止める理由も今更この街を離れる理由がありませんから」

「今後の対応はどのようにすればいいのでしょうか」

科学者の一人が手を上げて尋ねる。かけているメガネのレンズにスクリーンの光が反射していた。

「オリジナルの所在は掴めていませんが、あれの目標は一つだけです。先手を打つことはできませんが、準備を整え後手に回ることならば可能です。装着者は常時即出撃できるよう、待機。二階堂源のスーツは整備班がメンテナンスを行つています。終わり次第、装着してください。研究班は調査班から情報が入り次第、全て解析。以上です」

部屋が明るくなつた。話は終わつた、ということなんだろう。

詳しい説明、と言われたがまるで意味がわからなかつた。なんとかわかつた事と言えば、どうやら俺のせいでオリジナルとやらが逃亡してしまつたと言つ事ぐらいだ。

「あの、すんません」

そさくさとスクリーンやらなにやらの片づけを始めている科学者たちに向かい、俺は立ち上がりて言つた。科学者を代表してか、福井さんがこれ以上何か言つ必要があるのか、という態度で俺に視線を向ける。

「なんですか？」

「一体なんなんっすか、オリジナルって」

福地さんの顔がしかめられる。何を言つてるんだこいつは、と半ば呆れているようでもあつた。

いや、俺としては何言つてんだお前ら、つて感じですよ？
最初に発見されたビーストですよ。私達が倒さなければならぬ、最終的な目標でもあります」

「いや、それはなんとなくわかつたんっすけど。その、どこらへんが他のビーストと違うのか、とか教えて欲しいなあ、なんて」「少しの間があつた。場の空気が凍つた感じだ。え、なんだこれ。もしかして、聞いちやいけないことだったのかもしねりない。

「……君がオリジナルを知らないのかい？」

「ええ、まあ」

福地さんの声が呆れから驚きに変わる。そんなにまずいことなんか。でも、俺はそのオリジナルっていう名前のビーストの存在を今日知つたばかりだ。これまで、それらしい名前を聞いたことはなかつた。

なのに、この周囲の反応は一体なんなんだろう。

福地さんが口を開こうとしたその時。

「お前は知らなくていいことだ」

源さんの声が部屋の中響いた。源さんがイラだつたような仕草で席を立つ。普段の源さんは他愛のない会話と冗談ばかり言つよう

な人なのに。

「お前らも。余計な事を言うな」

本当に、こんな事を言つような人じゃないのだけれど。

最初にビースト。通称オリジナル。

それ以外は全然わからなかつた。けど、わかるうがわかるまいが、
兎にも角にも、オリジナルと言つ名前の敵が倒さなければいけない
相手だということだけは確かなようだ。

整備室、同僚、スーツ装着。

更衣室でインナーに着替え、整備室に向かった。インナーは手と足以外を、完全に被つていて、手首の先、足首までぴっちりと。競泳水着をさらにフィットさせたみたいな感じだ。ちょっと、うるつくには恥ずかしい格好だと思う。

お世辞にも広いとは言えない通路を歩いていく。乃木さんは先に着替えを終えて整備室に行っていた。源さんは俺たちが更衣室に入るのとほぼ同時に整備室へ向かっていた。

整備室のドアの前でICカードを翳す。機械がカードの中のICチップを認識し、ドアが横へとスライドした。

「ややつ、早瀬君じゃないですか。遅かったです。さぼったのかと思いましたよ？」

部屋に入るなり声をかけてきたのは、つなぎを着た女だ。名前を桂木瑞穂という。瑞穂とかいう可愛い名前をしているが、ただのメカオタクだ。化粧なんかしたことないだろうし、現に見たことがなかった。髪の毛はボサボサ。ゴムか何かで後ろにまとめてポニーテールのようにしているが、オシャレのためにやっているわけではない。確実に。

部屋の中は薄暗い。所狭しと何かの機械もしくは配線が積まれている。

桂木は小規模な町工場を経営していた父親の影響を受け、物心つ

いた頃には既に機械いじりを始めていたらしい。中学、高校の間にラジオ大賞やロボットコンテストに応募したりして、その殆どで金賞をとっていた。それだけの実績を持つてはいるため、高校を卒業した時はいくつもの有名企業から声が掛かっていたみたいだ。外国の大学からの推薦の話もあつたらしい。

で、どうしようかと迷つてはいる間に政府の人間にスカウトされたそうだ。なんで承諾したのかと言えばどうとこうことはない、世間にも公表されていないような最新技術を扱つてはいるからだ。ようするに、桂木は機械をいじる事ができればそれで幸せなのだ。それが、こいつの生きる目的なんだ。

ちなみに、俺と桂木は同じ年である。

「サボるわけねーだろ。勝手なこと抜かすな」

「そうですか？まあ、そのへんはどうでもいいです。メンテは終わつてるんで、早くこっちはきてください」

「へいへい」

平均年齢が高いこの施設の中で、俺と歳が近いのはこいつと乃木さんくらいだ。スーツの整備班とこいつともあつて顔をあわせる機会も多く、必然的に仲も良くなる。

「お、坊主。やっと来たか。少しばかりノズルの出力上げておいたぞ」

声をかけて着たのは同じく整備班の井出さんだ。整備班のチーフを任されていて、年齢はたしか六十を超えていたはずだ。顔にはシワがあるし白髪もあるし、でも、活力に満ち溢れている。

「マジっすか？まだ俺には早いんじゃないですか、その仕様」

「調節がちょっと面倒になつたが、その辺は〇〇がサポートしてくれるから問題ねえだろ。もう坊主もここに来て一年になるんだ。いい加減に色々と段階上げていかなきゃな

「そりゃあそうですけど」

「はいはい、おしゃべりはその辺にしどって。おやつさんも、早瀬君はこれから装着なんだから。そんなに喋りこもうとしないでくだ

さこよ。正直邪魔ですよ

「なんだとコリ。おい、瑞穂！」

「早瀬君、ほら早くこっちこっち

井出さんは整備班の人たちにおやつさんと呼ばれている。職人気質で面倒見のいいところなんか、まさに下町のおやつさんだ。

桂木は井出さんのことをじょっちゅうからかっているが、技術的な面では尊敬している。実際、なんだかんだ言つて井出さんの言う事は素直に聞くんだ。口では嫌なフリをするが、ちゃんと言われた事はやる。

部屋の奥は三畳ほどの広さのボックスが三つある。その内のひとつに入った。中心には鉄製の固定された背もたれのないイスが一つある。天井からロープで吊るされているのはスーツの両腕部だ。床には脚部の装甲が転がっている。壁には予備のスーツの部品が収納されていて、部屋の角にはヘルメットが転がっていた。

「……相変わらず、雑な扱いしてるな」

もう少し整理はできないのか、と半ばうんざりする。俺のスーツのメンテ及びボックスの担当は桂木だ。一応、自分で使った後は部位ごとにしつかり分けて片付けているんだけど、こいつがメンテした後だとこんな感じで乱雑にばら撒かれているんだ。

「これは雑なように見えて、計算しつくされた配置なんですよ。例えばホラ、なんか適当な部位を言つてください」

「……じゃあ、ヘルメット」

俺の声を聞くと同時に、一切迷うことなく桂木が動いた。部屋の隅に転がっていた赤いヘルメットを取り出し、俺に投げてくる。

「ほい。これですね」

憎たらしくくらいのドヤ顔をして、ふふん、と鼻を鳴らしやがった。

「くそ、こいつ。

「じゃ、ちやつちやとやつちやいましょ」

俺は足元にヘルメットを置いて、鉄のイスに座った。

「ぐへへ……やつぱり一年前と比べて身体付きよくなりましたねー」
ロープで吊るされていた右腕部分を手に取り、桂木はそれを俺の腕部へと装着していく。口元は不気味に笑っていた。

「気持ち悪いいぞ、桂木」

「いやいや。素直に早瀬君の成長を喜んでいたんですよ」

「お前がそんな奴かよ」

「心外ですねえ。私だつて、たまには人間に興味持つたりもするんですよ？」

両腕と両足部分の装着が終わつた。次は腰から下、太股辺りまでの部分だ。

俺は何も言わずに立ち上がる。桂木はその手に腰部部分の部品を持つている。

スーツの総重量は一十キロを超えているだろつか。無茶苦茶に重い。まだスーツを起動させてもいいから、強化スーツゆえの補助を受ける事もできない。一年前、初めて装着した時の事を思い出す。手があがらないわ、立てないわで、全てのパーツを装着するのに三十分くらいは掛かっていた。俺が準備を追えた頃には、源さんたちがもう敵を倒していた。

今ではちゃんとスーツの重さに耐える事ができる。日々のトーニングの賜物だ。そういうことを考えたら確かに筋肉は増えたし、身体付きもよくなつている。

「ま、私の本命はメカですけどね。そこは例え早瀬君でも譲れません」

「勝つ気なんてさらさらねえけどな？ お前みたいなメカオタク、こっちからお断りだつて」

「酷い言い草です。私だつてまだ二十歳のうら若き乙女なんですから、もうちょっとドーリケートにあつかってくれてもいいじゃないですか」

「メカの調整の為なら二日三晩飲まず食わず、しかも不眠不休でいられるやつを、乙女とはよばねえんだよ」

「女は変わったところがある方が魅力的ですよ。無個性よりは個性です。おやつさんが言つてました」

「お前の場合は変わり過ぎだつての」

下半身に全ての部品が取り付けられ、そして胴体部分までの装着が終わつた。後はヘルメットと、コアにあたる石だけだ。

俺の真後ろの壁側、そこにエロカードを翳す装置がある。桂木はそれに自らのカードを認証させ、淡く光る石を手に取つた。スーツのコアだ。

ほぼ全ての乱雑に扱つている桂木も、それだけは大切に保管している。扱う手つきも慎重だ。

「一体なんなんだろうな、これ。適正とか関係あるのつて、こいつのせいなんだろ？ たかが石のくせにさ」

ここまでやつてきて、この意思に関する詳しい説明をされた事がなかつた。源さんは政府の開発したエネルギー媒体とか言つていたし、科学者たちは数十年前に開発された兵器だと言つていた。井出さんは鍊金術の賜物、と冗談半分で笑いながら言つていた。

ようするに、みんな言つている事がバラバラなんだ。本当の事を教えてくれない。

「さあ。私はあんまり興味ないです。とりあえず、このエネルギーを基にしてステータスが動いているつて事くらいはわかりますけど」「いつもステータスの整備やつてんだろ？ その、他になんかわかんないのかよ」

「コア部分の改良と整備は殆どおやつさん一人でやつてますからね。ベテランの人たちならちょっとはわかるかもしませんが。私はエネルギー効率のシステムと駆動形の、後はスラスターつていう、従来のメカの機能を発展させた部分が主なので。コアを使つているこのステータスにしかないような機能、例えば必殺技みたいなエネルギーを直接ぶつけるパンチとかキックとか、その辺のシステムは私の管轄じゃないんですよ」

「全くわからないってことか」

「ま、そういうことになりますね……はい、装着終わりました」
ステッジが低い唸りを上げる。数秒後、身体が一気に軽くなつた。
強化ステッジが起動したんだ。

「わからなくて、対して問題もないのです。私はメカさえいじればそれで。一応、今度暇があつたら、おやつさんに寛いてみますけど」

「そうか。そうしてもらえると助かるよ」

俺は足元のヘルメットを拾い、それを頭に装着する。

装着した直後は真っ暗なだつた視界が、一気に明るくなる。目の前は桂木が立つてゐるのが見えた。相変わらず色気なんてないような格好だ。まだ若いからなんとかなつてゐるが、歳をとつたらこういつはどうなつちまうんだろう。素体はそんな悪いわけなんじやないんだから、もうちょっと身の回りに気を使えばいいのに。こいつに言つても無駄だろうけど。

「お仕事頑張つてください。できればステッジを壊さないよう」

「……いつも、ステッジは壊してねえよ」

「そうでした。早瀬君が壊してるのは下水でしたね。損害賠償、そろそろ請求されるんじゃないですか？」

「問題ないんじやねえかな。多分……」

一ヶ月に一回までなら公共施設の破壊は黙認される。けど、今回はそれに対する被害が大きい。オリジナルとか言う奴を逃がしてしまつたんだ。その辺の考慮されて、ペナルティが増えるかもしねない。

父さんの残してくれた貯金を使えばなんとかなる。なんとかなるけれど、でも、できれば父さんの残した金には手を出したくなかった。

「ふーん。何が色々あるみたいですね。今度時間あつたら聞きました。どうか?早瀬君のためなら、ちょっとくらい時間裂いてあげてもいいですよ。おやつさんも許してくれるでしょう」

「まあ、大丈夫だ。悪いな。折角だけど」

むづ、と唸るよつな声をあげ、桂木は俺の胸部を叩いた。

「背負いすぎてもしようがないですよ。たまには、どこかで毒吐いた方がいいです」

氣を使ってくれてるんだ。素直に嬉しいと思ひ。

けど駄目なんだ。俺一人で抱え込むから、なんとかなつてているから。

感情をダムでせき止めてる。たまに溢れる思ひはあるけれど、それでもなんとかなつていてる。どこかに溝をつくつて少しでも感情を外に出せば、そこから一気に決壊してしまう。

だから他人には言えない。この感情は俺だけのものだ。

この悩みも苦しみも怒りも悲しみも何もかも、俺が一人で耐え切らなきやいけない。誰かに漏らせば、俺はそのまま崩れてしまつ。

「サンキューな」

俺は一言桂木に告げて、整備室を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5379z/>

職業ヒーロー、月給手取り四十万。転職希望中。

2011年12月21日14時50分発行